職業の構造と動向

――新たな展開をみせる職業研究――

特集内容

職業研究をめぐって―漱石の空想から　松本安彦・統括研究員
職業情報の収集と職業の数値化―意義と可能性　松本真作・副統括研究員
職業に関する数値化情報の解析　佐藤舞・臨時研究協力員／鎌倉哲史・日本学術振興会特別研究員
職業移動からみた職業の類似性　西澤弘・主任研究員
職業情報とキャリアガイダンス―その政策的・理論的・実践的示唆　下村英雄・主任研究員
激変するＩＴの仕事―ＩＴ産業のこれからと人材　手計将美・情報サービス産業協会部長
米国と英仏独の政府機関による職業情報　リン・シュナイパー・元米国労働省エコノミスト

昨今の労働市場は、失業率の高止まりや新規学卒者の就職難など、依然として厳しい就職環境が続いている。しかし、その一方で、若者の高い離職率や求職者と企業のミスマッチ、高齢社会の進展のなかでの働く人のキャリア形成などが課題となり、希望に沿った求人情報や職務情報の提供を行うなど適切な職業選択の必要性が高まっている。特集では、職業の面から客観的な基準数値を示し、人と仕事を結び付けることに繋がる報告書「『職務構造に関する研究―職業の数値解析と職業移動からの検討―』」の内容や、諸外国の動向などを紹介する。

職業研究をめぐって
―漱石の空想から

JILPT統括研究員　松本安彦

1　漱石と職業研究

「私はかつて大学に職業学という講座を設けてはどうかということを考えたことがある。建議しやしませぬが、ただ考えたことがあるのです。なぜかというと、多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。もちろん天下の秀才が出るものと仮定しまして、そうしてその秀才が出てから何をしているかというと、何か糊口の口がないか何か生活の手蔓はないかと朝から晩まで捜して歩いている。……その秀才が夢中に奔走して、汗をダラダラ垂らしながら捜しているにもかかわらず、いわゆる職業というものがあまり無いようです。あまりどころかなかなか無い。今言う通り天下に職業の種類が何百種何千種あるか分からないくらい分布配列されているにかかわらず、どこへでも融通が利くべきはずの秀才が懸命に馳け回っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなか無い。……だから大学に職業学という講座があって、職業は学理的にどのように発展するものである。またどういう時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやって、たとえば東京市の地図が牛込区とか小石川区とか何区とかハッキリ分かっているように、職業の分化発展の意味も区域も盛衰も一目の下に瞭然会得できるような仕かけにして、そうして自分の好きなところへ飛び込ましたらまことに便利じゃないかと思う。まあ、これは空想です。実際やって見ないから分らぬが、恐らくできますまい。できたらよかろうと思うだけです。非常に経済なことにはなるでしょう」

これは、夏目漱石が明治四四年八月に明石において行った講演『道楽と職業』の一部である。講演は、上記のような「職業研究」（職業学）論から始まって、他者のためにする行為の社会的分業である職業の在り方に展開し、職業の転変変化の激しいこと、また、分業が進んだ結果としてのいわば「全人性」の喪失に触れ、最後には自我と倫理の相克の探求者である漱石先生らしく、収入が得られるかどうかにかかわらず「自己本位」であるべき芸術家という特殊な存在を定義して締めくくっている。

興味深く思われるのは、上記の引用の中に、「職業研究」が持つ主要ないくつかの側面、すなわち①学生や職を探す人たちのための利便に供しようとする側面、②そのために「職業の分布配列」を明らかにしようとする側面、③「職業の学理的発展」や「時世に伴う自然の進化の原則」を探求しようとする側面などが先生一流のユーモアを交えて語られていることである。

また、もう一点付け加えるとすれば、明治四四年という時点では（「漱石が生きた時代は」と言い換えてもいいかもしれないが）、未だ江戸時代がそれ程の昔ではなく、封建的な身分制の残滓が社会にも個々人の意識にもまだ残っていただろうということである。その中で、個々人が「何百種何千種あるか分からないくらい分布配列されている」職業の中から「自分の好きなところへ飛び込ましたら」さぞいいだろうと言っているのは、漱石にとっても、ひとつの理想の提示であり、そのための方法論の提示でもあったのではないか。小説においては、自由と解放に伴う責任の重圧と孤独を描いた漱石先生ではあるが。

2　戦後の「職業研究」と「職業ガイダンスツール」開発

上記のとおり、明治四四年の漱石は職業研究（職業学）について「まあ、これは空想です。実際やって見ないから分らぬが、恐らくできますまい。できたらよかろうと思うだけです」と述べているが、今日までの状況を概観すると、あるところまではこの「空想」が実現してきている。

戦後の労働省（現在は「厚生労働省」）及び当機構における職業研究及び職業ガイダンスツール開発の歴史を簡単に振り返ると、

・一九四七年に労働省の「職務分析」開始。一九五一年からは公共職業安定所職員も動員して一九六二年まで実施された。一三〇〇事業所で一万四五〇〇の職務を分析。結果は「職務解説書」として職種ごとに順次まとめ、一九六一年の第一七三集まで作成。解説職務数八五〇〇。GHQの指導もあってか、詳細かつ網羅的な職業情報（漱石の言う職業の「分布配列」）を整備することで民主的な労働市場を確立しようという強い意気込みが感じられる取り組みである。

職務解説書の項目は、

○　仕事の内容〔何を、何のため、やり方〕

○　作業者の所要資格〔経験、年齢、技能養成、雇入方法、他の職務との関係〕

○　作業遂行に必要な方法〔責任、知識、精神的働き、器用さ、正確さ〕

○　作業者の身体的要件〔身体的動作、身体への影響等〕

○　作業者の特質〔身体、知覚、知能、気質、対人等〕

○　作業環境
○　装置・資材・備品・消耗品

などであり、これを基に、一九五三年からの「職業辞典」、「産業職業図鑑」など、公共職業安定所などの相談機関や学校における職業指導用のツールが刊行されている。

・　その後、一九六九年に当機構の前身のひとつである「雇用促進事業団職業研究所」が発足し、これらの職業研究や職業ガイダンスツールの開発がここに引き継がれると、社会学的・経済学的なアプローチを含め、多面的に職業研究が展開された。

・　これらの成果を生かして、一九七四年には「新時代の職業」が発行される。これは一九六〇年以降の技術革新や第三次産業の発展によって登場した当時の「先端職業」の解説書である。コンピュータ、金属加工、装置産業、営業販売、対事業所サービス、レジャー産業、生活基盤保全の七分野について動向を解説。そこに含まれる六五職業について仕事の内容、所要の学歴・訓練・経験・能力・要件、作業環境などを解説しているが、注目されるのは、これらの職業ごとに「現状と将来」を解説するとともに、「産業・職業の変化と展望」の章を設けて、「サービス経済化」や「職務内容における知識集約化」について強調していることである。漱石の言う「職業の学理的発展」までは手が届いていないとしても、「時世に伴う自然の進化の原則」をとらえ、さらには将来展望まで描こうとしていたと言ってよいだろう。

・　さらに一九八一年には、「職業ハンドブック第一版」が公表された。ここでは「新時代の職業」の六五職業が拡張され、代表的な二四二職業について

○　どんな職業か
○　この職業に就いている人たち
○　この職業に就くには
○　労働条件の特徴
○　この職業の歩みと展望

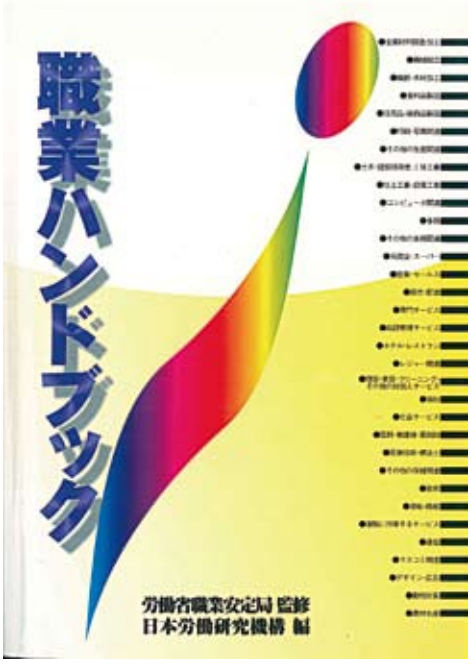
が詳細に記載された。巻末には産業別・職業別雇用者数推計に基づく「職業の世界の将来」も付されていた。この「職業ハンドブック」は、「職業ハンドブック一九九七年版」（三〇〇職種）まで逐次改訂・拡充され、職業相談機関や学校等において広く利用された。

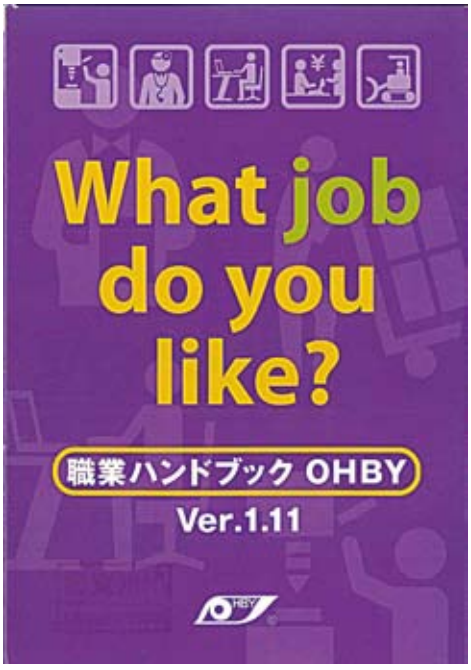
・　二〇〇〇年代に入ると、パソコンやインターネットの活用により職業情報のアクセス利便性の向上を図ることに力点が置かれた。当機構が開発提供したものとしては、「ＯＨＢＹ」（パソコン版の中高校生用職業ハンドブック。二〇〇二年リリース）や「キャリアマトリックス」（インターネット上の職業情報サイトで二〇〇六年～二〇一一年リリース。五〇〇職種強）がある。

　このころになると経済社会の不透明性が増す中で、個々の職業の「展望」については記述が困難になっていた。しかし、その一方で、インターネットを通じた情報収集が容易になったことを生かして職業の諸要素の数値化が試みられ始めた。具体的には、キャリアマトリックスにおいて、「どんな職業か」、「就くには」、「労働条件の特徴」に関する記述とともに、

○　従事者の興味の傾向（現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的）
○　従事者のワークスタイルの志向（達成感、成長、社会的地位、人間関係、自律性、労働条件）
○　職業スキル・知識（読む、聞く、書く、話す、数学、科学、論理と分析、問題解決、他者との協調、説得、プログラミング、オペレーションとコントロール、トラブルシューティングなど）
○　仕事環境（作業環境、人との関わり方等）

の各項目について、従業員自身がインターネットを通じて回答した評定結果をまとめて「職業プロフィール」として掲載していた。





3　職業研究の達成と隘路

　こうして見ると、明治四四年の漱石の「空想」は、かなりのところまで現実化されてきたと言ってもいいのではないかと思われる。

　漱石先生の指摘した、職業研究における、「①学生や職を探す人たちのための利便に供しようとする側面」と、「②そのために『職業の分布配列』を明らかにしようとする側面」については、ａ）当機構においても五〇〇以上

の職業（二〇一一年のキャリアマトリックスの廃止時点）について、b）かなり詳細で客観的かつ精度の高い情報を作成・更新し、c）書籍のみでなくパソコンやインターネットも活用して利便性の高いアクセス手段で提供するという努力がなされてきた。また、d）各職業の特性や職業間の差異については、数値的なプロフィール情報の構築の試みもなされてきた。

もちろん、掲載されている職業（職種数）が完全に網羅的で個々の職業についての情報内容が完璧なものだったかと言えば、更なる向上の余地があったとは言える。たとえば、「キャリアマトリックス」の五〇〇職種強や「職業ハンドブック」の各職業について五〇〇〇字程度という達成も、さらに上をめざす途上だった面がある（だからと言って、あまり文字数が多いのも利便が悪いし、映像媒体ならばどうかと言えば、よりインパクトのある情報を伝えることができる面はあるにしても、詳細な情報を伝達するためには所要時間が長くなりすぎる面がある）。しかも、漱石先生の言うように職業には生成分化や盛衰があり、かつ個々の職業の内容は常に変化しているので、情報内容の陳腐化を防ぐためには、たゆみない継続的な努力が必要である。さらに、数値情報についても一般的な職業理解の利便に供するため、よりわかりやすく的確なものとするための研究の途上にある。

しかし、これまでの努力や成果が相当なレベルにまで達し、多くのニーズに応えていたことは、キャリアマトリックスのアクセス件数が極めて多かったこと（二〇一〇年度にページビューは二九〇三万件、利用が二九一万件）などからも証拠だてることができる。

その一方で、漱石先生が指摘した、職業研究の、「③『職業の学理的発展』や『時世に伴う自然の進化の原則』を探求しようとする側面」となると、社会経済的事象に未来決定論的な考え方を持ち込むこと自体に内在する問題はさておくとしても、実現に限界を感じるところが多い。特に、高度成長からバブルにかけての時期には自信をもって、かつ、多くの場合楽観的に書かれていた職業ごとの「将来展望」に関する記述が、バブル崩壊以降トーンダウンし、二〇〇〇年以降は書かれなくなった。そのように、個々の職業の将来予測はますます困難になってきている。経済のグローバル化に伴い、ある地域・ある職業の将来展望を変化させる要因が全世界に拡散していることだけをとっても、その困難性が顕著に増してきたことが理解できるだろう。

漱石先生が「空想」と言ったことは、部分的にではあるが、未だに説得力があるのである。

4 職業研究の展望

このような中で、今後の職業研究はどのように進めるべきだろうか。以下にポイントになりそうな点を記してみたい。

（1）目的の明確化

目的の整理・明確化が、職業研究の今後の進め方の道標となり、そこからいくつかのポイントが見えてくるであろう。

① 進路選択・職業選択やキャリアガイダンスのため

漱石先生も指摘しているように、職業研究の成果である職業情報は、進路や就職を考える学生や職探しをしている人々に大きく貢献できる。その際には、情報が的確・新鮮かつ網羅的であるべきことはもちろん、自分がその職業に就くことのできる方策や、もし就いた場合にどのような日々をどのようなやりがいをもって過ごすことになるのかなどを含め、生き生きと多面的に描かれているほどよい。

また、情報に容易にアクセスできるようにすることも重要であるが、その際、自らの興味・自信の方向や得意分野から、また地域に現に存在する求人の職業からなど、様々な方向から職業情報を探索することができるようにすることで、ガイダンス効果を更に高めることができる。

その一方で、職業研究の成果は、これらの人々をサポートする側にとっても重要である。職業相談・紹介機関や学校・職業訓練施設の進路指導担当・職業指導担当などである。これらの担当者は、学生や職探しをする当人以上に詳細かつ網羅的な職業情報を使いこなす必要がある。たとえば、学校では高校の進路指導担当教員、大学等の就職課やキャリアセンターの担当者などがあらかじめ的確で十分な職業知識を持ち、また、必要な際にはより専門的な職業情報にも簡便に接することができる環境を作ることが望まれる。

なお、日本においては、大卒で総合職として採用される場合など、「就職」というよりも「就社」と呼ぶべきケースも多い。そのようなケースでは、様々な仕事をローテーションする中で適性にあった部署に落ち着く場合や、いずれ管理職になるために種々の経験をさせる場合などがある。しかし、いずれにしても会社が各種の職業で構成されていて、個々のローテーション先も何らかの「職業」であることを考えると、「何百種何千種あるか分からないくらい分布配列されている」職業についてなるべく広範な知識を持っておくことは、就職先の選択やその後の社会生活に大きく貢献できるであろう。

② 「職業選択の自由」実現と労働市場機能増進のため

視点を変えれば、職業研究の成果である職業情報は、「職業選択の自由」という憲法に規定された権利の実現と

労働市場の機能増進に役立つ。先に漱石に関するところで述べたように、また、戦後の労働省が意図したであろうように、個々人の自由意思や適性を生かしつつ適材適所が実現できる近代的で機能的な労働市場を作るための基礎的インフラとして、的確・新鮮で網羅的な職業情報は欠かせない。

③ 教育訓練やマンパワー政策のため

さらに進んで言えば、職業研究の成果が職業訓練や職業専門教育のコース設定のみでなく、国レベルのキャリアガイダンス政策やマンパワー養成政策に参照されることも視野に入れるべきであろう。

④ 人間性や経済・社会の構造変化の探求のため

職業は人間性や人間活動の発現の一形式であり、社会構造・経済構造とその歴史的推移等の現れでもある。したがって、職業の研究は、それを通じて人間そのもの、社会・経済の実態や変化に迫る一助ともなるだろう。たとえば、「職業適性」の研究は人間本性の研究と深いところでつながっているし、「先端職業」の研究を通じて、進行中の社会・経済の変化の一面が見えてくることもあろう。これまでにも「ものづくり」現場の職業的熟練に着目した研究、「プロフェッショナル研究」や「スペシャリスト研究」などが、社会学者や経済学者によって行われている。

また、ある職業に就くプロセスという観点は、職業と教育・訓練投資の関係の視点にもつながっていく。「一億総中流」から「格差社会」に向かう変化が議論されるようになって久しいが、家庭の教育投資の余力の格差が、将来の職業選択の範囲の制限につながる傾向が強まるとすれば、社会の在り方にかかわる根本問題のひとつになるだろう。

（2）情報収集・分析の方法論

職業の研究は、現に存在する職業の実態をくまなく把握することが出発点であるから、情報収集に工夫を凝らす必要がある。

情報収集の基本として、「職務分析」のような現場観察とヒアリングは重要である。一般的に職業の世界における詳細かつ網羅的な情報の収集と、その鮮度を保つための更新は、想像される以上に難事であってコストもかかるので、十分な労力・資力を準備することは容易ではない。また、各職業の実態を知悉した協力者にボランティア的な奉仕を求めざるを得ない。これらのいずれの面でも、職業情報の収集をめぐる環境は厳しくなっている。

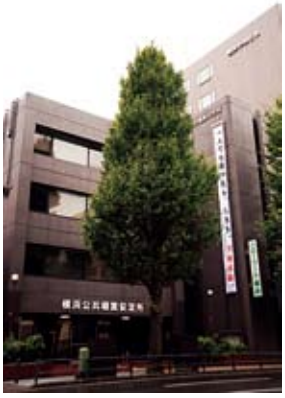
このような中で、やはりＩＣＴ（Information and Communication Technology）技術に着目する必要がある。ＩＣＴ技術の活用は「情報提供」の面において注目されやすいが、既にインターネット上のブログなどで、生々しい職業情報が交換されていること、ネットモニター調査が拡大していることからもわかるように、情報収集の手段としてもＩＣＴ技術は非常に有用であるから、これを効果的に使うことが重要となろう。

インターネット経由の情報収集が優れていると思われるのは、従事者の生の声を、短期間に相当量収集できる可能性があることである。当機構においても二〇〇〇年ごろからインターネット経由で職業に関する数値情報を収集し、分析するアプローチが行われていることは既に述べたが、今後も、職業移動の分析なども含め、さらに多面的で精緻な情報の収集・分析が期待される。これとあわせ、今後新たに着手する必要があると考えられるのが、インターネット経由による「記述情報」の収集・分析である。従業員が主観的に感じている職業の実態や先行き感も、職業ガイダンスにとっては重要な情報であり、これらの把握に大いに役立つことが期待される。

なお、個々の職業のレベルでの将来予測が困難な時代になってきていることは既に述べたが、大括りの職業分野や職業の世界全体を貫くトレンドについては、過去からの職業情報の蓄積などを基にすることで、これを明確にし、将来への示唆を得る余地があるだろう。

（3）変化への着目

これまで述べてきたように、職業情報においては的確性・詳細性・網羅性・新鮮さなどが基本的に重要であるが、現実的には投入できる労力・資金に限界があり、たとえば各年度において重点的に情報を収集し・分析する職業の絞り込みが必要になる。



その際、変化の激しい部分に着目することがもっとも自然であろう。それが情報の陳腐化を防止するためにもっとも有効であるうえ、その職業の変化の背景となっている要因は、多少なりとも他の職業にも及んでいることが推測できるからである。これを敷衍することで、職業の世界を通じたトレンドと、その将来に対する示唆を得ることにつながり得る。

5 おわりに

夏目漱石の「職業研究」論をヒントに、戦後の職業研究の歴史をひもとき、今後の在り方を考えてきた。漱石先生のヒントが「職業情報」に関するものだったので、「職業情報」の収集・分析・提供に話が偏ったことは御容赦いただきたい。

漱石先生も、自分の講演記録がこのような拙い記事の出汁に使われてさぞ迷惑していることだろう。

〈プロフィール〉

松本　安彦（まつもと・やすひこ）

ＪＩＬＰＴ統括研究員

一九八二年 労働省（現、厚生労働省）入省。厚生労働省職業安定局業務指導課副主任中央職業指導官、厚生労働省職業安定局総務課人道調査室長・サービス推進室長等を経て、二〇一一年八月より現職。